生命論研究会

研究代表者：QU Honglin
指導教員：美馬達哉先生

立命館大学大学院　先端総合学術研究科
院生プロジェクト　生命論研究会　公開研究会

ナラティブ・メディスンを考える
ケア、権力、そして〈語り/聞き〉の生政治

「ナラティブ・メディスン（Narrative Medicine）」は、医療における人文学的視点の導入として、患者の語りや物語的経験に焦点を当て、医師と患者の間に共感的関係を築く実践として注目されてきた。だがその一方で、ナラティブ・メディスンが専門職教育への取り込み、臨床現場における「共感の技術化」などにより、ナラティブ・メディスンの実践自体が制度的な文脈に包摂され、あらたな規範性や支配の装置として機能する可能性も指摘され得る。

本公開研究会では、「語ること」と「聞くこと」の非対称性、臨床現場における「語り」の管理、記録と再編成の倫理、そして「共感」が前提とする身体・関係性の政治性を再考する。ナラティブ・メディスンが持つ可能性と限界を、思想史・医療史・倫理学の交差点から批判的に検討するため、秋葉峻介講師を招き「作品としての生命の政治学」としての視座を開く。

プログラム

15:30〜15:40　オープニングリマークス

15:40〜16:30　基調講演
自己を作品化する実践としての共同意思決定？
フィクションとパレーシア、あるいはそのはざまで
秋葉 峻介（山梨大学 講師）

16:30〜17:00　プレゼンテーション
テクスト化される〈生〉
ナラティブとしての臨床的自己
QU Honglin（先端研　博士課程）

16:30〜17:00　研究会メンバーによる口頭発表

17:30〜18:30　総合討論

日時

2025年8月1日（金）15:30〜18:30

場所

立命館大学 大阪梅田キャンパス　演習室2
（入場受付は15：00から）
〒530-0018 大阪市北区小松原町2-4　大阪富国生命ビル5階

Zoom

ID: 981 739 4364　パスコード: 999044

参加申込

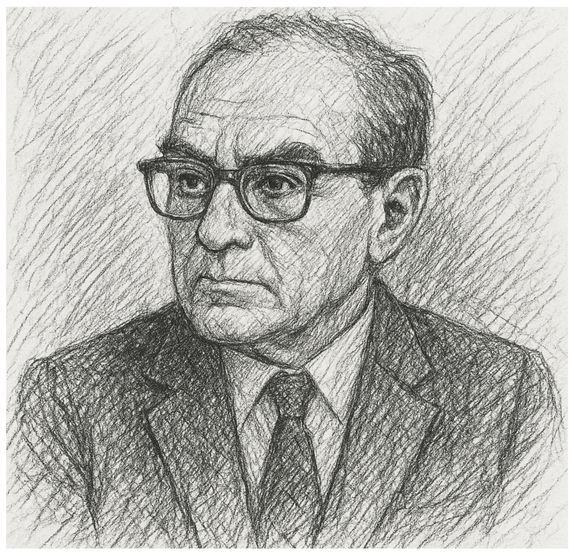
https://forms.gle/ekuNeF5nP3deSLAYA

資料準備の都合上、お申し込みは開催日の3日前までにお願いいたします。なお、終了後には情報交換会（懇親会）を予定しております。参加をご希望の方は、必ずお申し込み時にその旨をご記入ください。

お問合せ：chuhunglin@outlook.com（曲　虹霖）

Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France

澤瀉久敬歿後30周年記念シンポジウム



HISAYUKI
OMODAKA
1904—1995

共催：医学史研究会
立命館大学先端総合学術研究科
院生プロジェクト生命論研究会

澤瀉久敬とその不満

檜垣　立哉　HIGAKI TATSUYA　専修大学　文学部 哲学科　教授・大阪大学　名誉教授
村岡　潔　MU RAOKA　KIYOSHI　岡山商科大学　客員教授・京都府立医科大学　客員教授
香西　豊子　KOZAI TOYOKO　佛教大学　社会学部　現代社会学科　教授
美馬　達哉　MIMA TATSUYA　立命館大学　大学院先端総合学術研究科　教授
杉岡　良彦　SUGIOKA　YOSHIHIKO　京都府立医科大学　大学院医学研究科　医学生命倫理学　准教授

開催趣旨

澤瀉久敬（1904–1995）は、「医学とは何か」という問いを、技術的応用でも、教育的だけでもなく、思考の根底から照射しようとした数少ない思想家である。彼が遺した『医学概論』（全三部）および『医学の哲学』などの著作は、いずれも医学の内部に閉じることなく、科学・生命・医学という問題系を媒介として、＜医学＞を思想の場へと押し戻す試みであった。

こうした視座において、医学とその歴史もまた、過去の知識の集積ではなく、「現実の不満や矛盾と苦闘し、新たなる方向を見出すためにも求められる」（中川米造（1960）「『医学史研究』創刊に際して」『医学史通信』第二号）とされたように、医学、医学概論、そして医学史などの諸学問は現代の実践に批判的介入を可能とするものである。そして、この文脈において「生命」とは、定義や分類の対象ではなく、むしろ語り得ぬものを語ろうとする試みにおいて、その不可能性ゆえにこそ思考されるべき存在として現れる。

本シンポジウムでは、澤瀉久敬の思想を、医学史・医療社会学・哲学といった複数の学問領域を横断的に再検討いたします。単に既存のディシプリンに従って論じるのではなく、そのようにして生まれる学際の余白を手がかりに、現代における医学哲学および生命論の刷新に資する基盤の構築に期するものにほかならない。

開催概要

日時：2025年12月6日（土）14:00〜
会場：立命館大学　大阪いばらきキャンパス（仮）

研究会案内

〈生命〉というのは、もはや単なる生物学的事象の指示対象ではない。それは近代における知の制度的配置の中核を成しつつ、統治・倫理・経済・美学の諸領域を横断しつつ変容し続ける概念である。そして現代社会において、「生命」という語は、あらゆる領域を貫通するキーワードとして機能している。生殖医療、遺伝子工学、終末期ケア、気候危機、感染症管理、そしてAIといった領野において、生命はもはや自然的な事実だけではなく、制度的に定義され、政治的に管理され、倫理的に構築される対象へと変貌している。

とりわけ、本研究会は以下の三点を柱とする。一、生命論の哲学的系譜の再検討：ベルクソン、カンギレム、フーコー、ドゥルーズ、モランらに代表される現代思想による生命論の展開を鳥瞰する。二、日本近現代思想における生命観の特異性の検討：澤瀉久敬らの仕事を手がかりに、近代日本における生命観の変容とその制度的・文化的条件を析出する。三、医療、教育、福祉、司法等における生命の定義と操作の実践、すなわち生命に対する介入の歴史的変遷に、総合的視点を導入しつつ、検証する。

Le mot "texte"
Roland Barthes
14 Sept 72